随筆再掲載

＝巻頭・随想＝

経筒と花

安達　瞳子

〝パッと、西洋と日本を切り裂くような花を挿してくださいよ、えっ？　ね！〟と。突然、芥川比呂志氏に宣告された時、私は震え上った。舞台は〝清氏の装置で一部のムダもスキもない簡素さ。おまけに登場人物は小池朝男氏の神父フェレイラと中谷昇氏の長崎奉行の只二人だけ、キリスト教と仏教の真っ向うから対決で必然的に舞台中央の一瓶の花が両者の断絶を象徴するという、私にとっては怖しい仕事だったからだ。三年程前　劇団「雲」が「黄金の国」（遠藤周作・作、芥川比呂志・演出）という戯曲を上演した時だ。

どうゆうわけかその時私は、子供の頃から父の書斎にある青銅の経筒を花器にしようと決め込み、即座にその晩申し出た。が、意外や父は

〝冗談じゃない、あんな地味なものは舞台では映えぬ。〟

と拒否。爵も卣も家にある古銅器（大方はニセモノだろうが……）はみんな好きな私だが、その時ばかりは経筒に執着してメソメソと泣き、行きつけの古道具屋を始め見知らぬ骨董屋にも電話帳を頼りに

〝経筒ありませんか、心あたりないですか？〟

と必死で問うたりした。が結果は、金箔をほどこした華麗なものだったり蓮花を彫った抹香臭いものだったり、私の好きな簡素で切ない、蓋をしてじっと眺めていると何やらゆらり煙の立ち昇るような姿のものは一個も見つからず、とうとう私は、父の怒声を後にその経筒を持ち出し、葦に菖蒲を透せたつたない花を挿して数十日間の地方公演を終えてしまったのだ。

その父が去った昨夏、何故か私は再び、主を失った書斎から経筒を持ち出した。何のへんてつもない、けれど、青い錆に無性に心惹かれるこの銅器に、いつの日かきっと、これが日本の生花だという花が挿してみたい。秋は紅葉や秋草を冬は寒椿や水仙を、そして春は桜柳、夏は夕顔と水草を挿してみたいのだ。が、そんな、ままならぬままベタリ座り込んでばかりいる晩、ふっと私は恐くなる。この経筒は、誰かが愛する人の屍と共に写経を封じ込めて埋めた用器なのだ。その人は多分、愛する人との別れに耐えかね、もとより不可能な肉体と魂との分離説を必死に信じたに違いなく、ならば経筒は、人間臭くて哀しい魔薬入れと思えて切ないからだ。そしてまた、青い錆が美しいのは、えんと涙と血を吸いこんだ土中で、一刻も休まずに時を刻んで来た印だからだろうかとも思う。古銅器の青錆は私にとって止ることのない〝自然の時計〟で、自分の存在を非情に考えさせてくれるように思うからだ。ひとときの生命しかない手折られた花を古銅器に挿したがる私のそうゆう気持は、思えばずいぶんと日本的なのだろうけれど、一個の経筒は私にさまざまな思いをめぐらさせるのだ。

〈華道家〉

この号は保存状態が悪いため、一部解読できない部分があります。
ご了承ください。

＝巻頭・随想＝

ある楽天家の喜び

武者小路実篤

僕も老人になった。かきたいものがあればかくが、若い時とちがって、どうしても書いておきたいと言うものが、頭のなかに一ぱいあって、出たくって仕方がないと言う事はあまりない。鋼の事はなお書きたい事はない、お断りすれば一番楽なのだが、途って話しているとつい、断る気もせず、何か書かないとと言う気になる。悪いくせである。生きている以上はそう好きな事許りも出来ないと見える。生きている以上は何か役に立つ事をしたい。しかしそうう書きたいものが浮んでくるわけでもない。しかし生ている以上はそれだけの事はしてゆきたいと思っている。僕は人間に生れた事は、一つの宿命だと思っている。生れると言う事を考えて生れたわけでもない、人間と言うものがどんなものか、まるで知らずに生れて来た。実に不思議に生れて来たのだ。生れた以上は人間として生きられるだけ生きて見たいと思う。僕は死にたいと思った事は一度もなかったと思う。僕は八番目に生れた僕で、僕が満二歳と五ケ月の時に父は「今死ぬのは残念だ」と言って死んだ事を母から何度も聞かされた。僕は父の記憶は何にも持っていない。子供の時は青い馬をつれて帰ってくると聞かされたが、生きていた記憶は何にもないから、親は一人のものだと思っていた。僕が一寸病気をすると、母は死にはしないかとすぐ心配した。八人生れて、始めの五人は一年と生きていたものはなく、六番目の鯖からそだったが、それも僕の十三・四の時死んだ。七番目は兄でこれはもう四ケ月たつと満八十になる時に死んだ。兄はドイツ大使をしている時、オリンピックの大会がベルリンにあり、僕は兄の住んでいる大使館に泊ってオリンピック競技を見た事がある。兄と僕は相当生きたわけだが、僕は子供の時からよく病気をし、その度に、死ぬかと思って母が心配するので、僕も今死んでは困る。何のために生れたのだと思った。そんな事で自分の死ぬ事を心配しすぎて生きて来た。今でも出来るだけ生きて人間が少し立派になるまで生きていてやりたいと思っているが、人間は立派になりそうでいつまで立っても立派にはならない。もうあと二・三百年程たったら少しは立派になってくれるのかと思う。よくなりそうな顔をしているが、いつまでたっても、馬鹿は多数にいて平気で人を殺している。もっともそう言う人は多くはないが、人間はどうも生きると言う事が大変なようだ。だがいい人間もいる事は事実で、僕は人類の歴史をそう悲観してはいない。今に段々ものになって、人類は利口になるのだと思い、今にいい世界が生れるのだろうと楽しみにしている。これは事実である以上、そう言う風に、人間は出来ているのだと思って楽しみにしている。そう言う風に人間は出来ているのだと僕は思い、人間のつくられ方は、悪くとも、それ以上いい面ももっているのだと思い、人間の将来を、何となく楽観し、人間の出来は、存外うまく出来ているのだと何となく思っている処が、面白いと思い、しっかりして、人間の為に働きたいと思っている。楽天的に出来、この世にいると美しいものも沢山あるし、いい人間もいくらもいるし、面白い事も段々生れてくると思っている。そう人間がつくられている。僕達は新年がくる度に今年はいい年になってくれるとつい考える。利口か馬鹿か知らないが、僕は人間は今に益々利口になると思って喜んでいるわけである。

（作家）